

リスト文献とリスト文庫

小林昇

1

ドイツ資本主義、ひいては後進資本主義一般の歴史的特質を理解するうえにすこぶる有益な、フリードリッヒ・リストに関する研究は、現在のところまだきわめて不十分だといわねばならない状況にある。それは『リスト全集』の完成がようやく一九三五年になつてからだったこと、この全集が明らかにした、リストの全体系とリストの活動領域とがいちじるしく広大であること、にも由るが、これと関連して、リストのビブリオグラフィが不備であることと、ひろくリストの周辺の資料をも集めたロイトリンゲン市のリスト文庫の利用がまだまだ不徹底だということも、同時に省みられるべきであらう。

もとより、古典研究のばあいには直接資料(原典)の発掘は

リスト文献とリスト文庫

いつも新しくおこなわれており、全集の編纂はたえず現在の仕事であるときえ云いうる。古典学派の諸フィギューラについていえば、人も知るようにスミスの『文学講義』のノート (*Lectures on Rhetoric and Belles Lettres*) は最近発見されて刊行(一九六三年)されたばかりだし、その新全集の計画は、今の時点ではまた第一巻として実現されるには至っていない¹⁾。また、リカードウの全集の本文の完結はまださきごろの一九五五年のことであるし、J・S・ミルの全集も緒についたばかりである。ただ、とくにリストの場合は、リスト全集がその編纂にあたってはじめて発見したり、全集版によつてはじめて人々に近づけたりした原典がすこぶる多かつたばかりでなく、これらに対する研究諸手段についても今後の整備を待つというのが現状だといえよう。リスト研究は、徹底を欲する研究者にとつてはまだ

処女地の開拓にひとしい。だがわたくしはここでは、この処女地自体についてはなく、そこへ通ずる小径のいわば工事状況について、若干のことを記しておきたいと思う。それはリスト文献への手がかりとリスト文庫の概略とに関してである。

2

わが国における古典学派研究はなかなか盛んであって、天野敬太郎氏の努力による古典学派文献目録の作成という成果をもそれに伴っている。学術会議から刊行されている『*Bibliography of the Classical Economics*』のシリーズで、スミス、マルサス、リカード、J・S・ミル、ハイリー、ハンサム、チャーマーズ、ジョウンズ、メイトランド、ロングフィールド、マカロック、父ミル、シーニョア、デュゴルド・ステュワート、トゥック、トレンズ、ウェイクフィールド、ウェストらを四分冊のなかに収め、ほかに第五冊として *General Description of the Classical Economics* を持っている。これらは原典の翻訳、諸外国の研究文献、日本の研究文献をふくみ、補完と追加との仕事有望まれはするが、それ自身きわめて有益なものである。これに対して、われわれはこんにち、リストについては包括的な文献目録を持っていると云いがたい。そういうものはドイツにもないし、日本では計画も着手もされていないといえよう。

リストの原典と研究文献とについての目録は、ドイツでは

Max Hoeltzel が最初に作成して、リストの『国民的体系』の第七版（エーエムルク版、一八八三年）の新版（第八版）に収載した。すなわち『*Das Nationale System der Politischen Ökonomie von Friedrich List. Mit einer historischen und kritischen Einleitung von K. Th. Eberberg und einer List-Bibliographie von Max Hoeltzel, Stuttgart und Berlin 1925*』である（むろんエーエムルクの解説はもとの一八八三年版からあり、新版はヘルツェルの作成した文献を除いては旧第七版とおなじである）。ヘルツェルはリスト研究者であって『*Friedrich List. Ein Beitrag zu seiner Würdigung, I. Teil, Berlin 1919*』その他の著作を持ち、リスト全集の諸巻にも外部から協力を惜しまなかった人である。この人の作った右の最初のリスト文献は、リスト研究文献の部分に関してはすでに古くなり、また学説の通史やドイツ鉄道史に関連を持つ諸著作（例えばゾンバルトの『十九世紀ドイツ経済史』）をも収めてあって、その意味からはかえって純粋でないが、リスト自身による諸述作、すなわち *Werke Friedrich Lists in Druckschriften, Abhandlungen, Eingaben, Briefen usw.* の部分と、リストに関する記録類、すなわち *Amtliche Verfügungen, Berichte und Stimmen der Öffentlichkeit* の部分とは、リスト研究の飛躍のために大いに有益な基礎作業——正確にいえばそれへの着手——となった。リスト全集の第九巻で、アルトゥール・ゾンマーはヘルツェルの仕事をつぎのように評価して

いる。「リストの著作文献の確定——(リストは無署名で多くの論説を書いた)——がきわめてむずかしい……ことから、リストの著作のみならずリストに関する文献の完全なブリオグラフィーが欠けているという事情が理解される。とはいえ、『国民的体系』のエーベルク版の新版(コッタ)において示された、マックス・ヘルツェル博士の広汎なところが挙げられるべきであって、それは個人が限られた手段を用いて無私の熱中から価値のある準備作業を遂行したものである」(S.267)。

そうして、右のうち「リストの著作文献の確定」の範囲では、リスト全集の第九巻の末尾に収められた *Bibliographie* : *Die Schriften Friedrich Lists in zeitlicher Reihenfolge*(SS. 263—416) が、ヘルツェルの事業を継承してこれをはるかに完全なものとした。いまここに引いたゾンマーの言葉はそれへの *Vorwort* からのものである。この第九巻での仕事は、リストの筆に成るものか否かについてなお確認がたいものも疑問符をつけて収載し、本文一四四頁におよぶ尨大なもので、ジャーナリズムに活動した人物の著作目録としてはもっとも整備されたものといえるであろう。ゾンマーが述べているように、これは全集の編集者たちの豊富な経験と緊密な協力とによつてはじめて可能となった事業なのであった。だが、この著作目録についてはつぎの二つのことを指摘しておかなくてはならない。第一に、これにはリストの書簡の目録はふくまれていない。彼の日記についても同様である。それらはそれらを収めた全集第八巻の目

リスト文献とリスト文庫

次を成している。そうしてとくにリストの書簡については、第九巻が編まれた一九三三年以後にも発見されたものがあり、今後もその可能性があることを予想しておきたい。リスト文庫はそれらの原典ないしコピーの入手の努力をつづけている。第二に、著作目録の頁ごとの右端の欄が明らかにしているように、リスト全集はその組織的な編集ぶりにもかかわらずリストの全述作を完全に収録したのではなく、したがって全集の詳細な検討のちにもなお、リストの原典に対する研究の領域がなほどこ残されているわけである。ジャーナリストとしてリストが書いた原稿の量は、目の目を見えずに厝籠に入った多くのものはもとより別にしても、きわめて尨大だったため、全集はそのあるものを捨て、あるものは部分的にしか収録できなかったものである。さらに、リストがつぎつぎに主宰した諸新聞上に彼が書いたもののなかには、きわめて片々たる報告の類が多く、その収録は不用だと判断されたのであった。

だが、このような選択は、それが不可避のばあいにも価値判断を伴わねわけにはいかないから、リスト全集はその編集の立場に対する批判をまったく免れることはできないであろう。のみならず、この著作目録にも遺漏は見つけられるようである。例えば、東独の思想家ギュンター・ファビウンケはその方法論的な著書 *Zur historischen Rolle des deutschen Nationalökonomens Friedrich List*, 1955 のなかで、リストが編集者だった *Zollvereinsblatt* の Nr. 23, Jg. 3. (一八四五年六月

十日)に載ったリスト自身の論説 *Unsere Universitäten und die grossen Aufgaben der Gegenwart* をあげて、時代と国民との急務に対するドイツの教授たちの無関心をこの論説が痛撃していることを高く評価し、同時にリスト全集がこれを収めないうことを指摘して、全集の編集者たちがこれらの教授とおなじジャケツを着ているからではないかと皮肉を云っている。(SS. 213—14. 伊東勉・豊川卓三訳『リスト研究』二八二—八三頁)。

しかも、わたくしが検討したかぎりでは、右の論説はその題名をさへ全集版の著作目録に見いださないのである(フマビウンケは一九五六年に書かれた、彼の学位論文——おそらくは上記の著書——への自注においても、リスト全集がリストの進歩的・闘争的立場を無視したとよく批判している。Vgl. *Wissenschaftliche Zeitschrift der Hochschule für Binnenhandel Leipzig*, Jg. 1, 1955/56, Heft III, S. 79)。さうして、さういふ事情を考慮するならば、リストの諸原典の研究を(ごまのところ)ド、イツに住んで進めつつ全集版の著作目録——ここでは重要な原典とそうでないものとが活字の大きさで区別してある——をさまざまな角度から再検討することも、有益な仕事となりうるであらう。ただ、それは同時に、リスト研究の興行きの広さと困難さとを研究者に曉らせるであらうけれども。

なお、全集版の著作目録が掲げて全集が収録しなかつた諸論説のなかのわずかな一部分を、われわれは他の刊行物に拠つて読むことができる。それはこの著作目録の示す、いちいちの原

典についてのその後の収録(ないし引用)文献の記載に従えばよい。例えば、一八一九年五月二日付けの Statuten des deutschen Handels- und Gewerbsverein zu Frankfurt am Main は、さうして *Neue Stuttgarter Zeitung* の第八七号に載り、さうしてリストの創刊した *Organ für den deutschen Handels- und Fabrikantenstand* の同年十月二日号(第八号)に再掲されたものであるが、これは H. P. Olschans の実証的な著書 *Friedrich List und der Deutsche Handels- und Gewerbsverein. List-Studien*, Heft 6, 1935 の二二八—三〇頁に収められてゐる。また、*Staatslexikon oder Encyclopädie der Staatswissenschaften* (hrsg. von Carl von Rotteck und Carl Welcker), 1834—43 の第一巻のためにリストが執筆した、フリカ、アラビヤ等の項目のおもな部分はこの辞典の原版に拠らなう。Otto Jöhlinger, *Friedrich List. Gedanken und Lehren. Insel-Bücherei Nr. 260*, 1919 によつても読むことができる。

全集版の著作目録は、しかし、最近になっていくつかのよろこばしい修正を受けることとなった。それはこの目録が逸したり、草稿の所在を不明ないし紛失としてその内容を知りえないものと思わせていた、リストの公的書簡、上申書、その他の述作の原本が六點、テュービンゲンのパウル・ゲーリンク教授の努力によつて発見されたことである。それらは、*Friedrich List an Karl Graf von Reischach*, Tübingen, 8. Juni 1814

第 45 Gedanken über die Notwendigkeit einer Reform der den Oberämtern subordinierten Amtsstellen, insbesondere des Stadt- und Amtsschreiberi-Wesens. Von einem Geschäftsmanne, Juni 1814 以下の諸点(ドイツ) ゲーリンク教授はこれらその新著 *Friedrich List, Jugend und Reifejahre 1789—1825, 1964* (510 S.) の附録として全文を掲げ、それらが全集版の目録に入れられるべき位置を指定している。この書の本文の記述と分析とによれば、辛抱がよく探索されて発見されたこれらの原本が若いリストの思想の理解に對して——したがってまたリストの全体系の基礎の把握に對して——持つ意義は、なみなみならぬものである。ただ、すでに引退した、シュネットガルトの出のこの学殖ある経済史学教授のリスト研究は、地の利を得て郷土史的研究ともいうべき精密さを持っているものの、このことは反面、活動の地域が飛躍的に拡大した、壮・晩年期のリストにかかわる著作目録の追加・拡充は、現在はお未知の別の研究者から期待すべきことをわれわれに知らせるものようである。(ゲーリンク教授の新著の内容については別に紹介の機会を持ちうるであらう。)

3

つぎに、リストのビブリオグラフィのもう一つの重要な部分をなすべき、リストの研究文献の目録について述べておきた

リスト文献とリスト文庫

5。

上記のように、ヘルツェルのリスト文献は、リスト研究文献すなわち Veröffentlichungen, Nachrichten, Rezensionen usw. über Friedrich List und seine Werke の部分に關しては、ひろく関連文献をあげている点で用いかけたによっては有益でないことはないが、そこに収められた直接のリスト研究の諸文献に限つていえば、それらの収録にあたつて他に疎漏がなかつたかどうかを別とし、また一九二五年という作成の時点の古さを別としても、やむを得なかつた一つの大きい限界がある。というのは、この目録の刊行の直後(一九二七年)に発足したリスト全集は、リストの原典をいくつも發掘したり復元したりしただけでなく、それまでは手の届きにくかつた諸論説の多くを再刻し、書簡・日記を公刊して、リストに關する学界の知識を一挙に豊富にしたが、そのうえまた、各巻に周到な解説およびコンメンタールをつけ、これらをつうじてリスト研究史の上に決定的な一段階を画したため、全集以前のリスト研究は、こんにちではもはや研究史の素材としての意義しか持たないというべきだからである——リスト研究・評価史は、ドイツ資本主義ないしドイツ帝国主義の展開に對する側面的理解のための領域として、それ自体の意義を今後明らかにするではあらうが。

そうとすれば、たとえまだ十分に周到なものでないとはいえ、こんにちのわれわれにとつてともかくも有用な、リストの新しい研究文献としては、東ドイツのライプツィヒにある Deutsche

Bibliothek にそのカードとして備えられている目録が唯一の標準的なものである。これは数年前に水田洋教授がコピーを取寄せられ、現在わたくしが保管を托されているが、その内容は、リストの著作三四点、『国民的体系』の外国語訳四点、研究書一〇八点、研究論文一〇九点、リストの著作およびそれらの編集書等に対する書評一九点(合計二七四点)、リストの著作を除いたものの合計二五四点)で、年代の下限に属するものは一九五八年のレンツの小冊、すなわち **Friedrich Lenz: Friedrich List als politischer Publizist**, Berlin: Heymann; Zürich: Soientia; Wien: Gallus-Verl. [1958], 15 S. *Aus Zeitschrift f. Politik*, 1958 である。この目録の作成および補充の基準については、わたくしが滞独中に **Deutsche Bibliothek** を訪れる機会を持ちえなかったためもあって、若干の疑問も残る——例えば、のちに述べる *Mitteilungen der Friedrich List-Gesellschaft* 中のリストに関する諸論説は、ここではその Nr. 3 における、E・サリンとメンマーとのものだけが挙げられており、ほかには Nr. 2 (1927) が独立の冊子として記録されているにとどまる——が、タイプ原稿のかたちのままの学位論文の類までをふくみ、なかなか有用である。ことに、ドイツの大学図書館では一定の限界内で他の大学図書館の蔵書を送らせて閲覧することが許されるので、現地での研究者はこの目録のコピーを携えていれば便利である。

だが、この目録もまた、ヘルツェルの目録の研究文献の部分

が持った利用上の制約を、まだ免れていない。リスト全集の刊行以来はじめて緒についた本格的なリスト研究は、基礎資料の厳密かつ包括的な検討という不可欠の前提条件をみたした、多少ともまとまりのある成果を、まだ数少くしか生んでいず、その代表的なものとしては前掲のオルスハウゼンとゲーリンクとの二つにとどまる——ただし後者の意義は前者をはるかに凌ぐ——というような事情にあるから、この目録の内容の大部分を成す、全集以前の研究諸文献(および全集以前の水準になおとどまる諸文献)の集録は、リスト研究の前進のためには大きい意義を持たないのである。ことにリストのようにポピュラーな人物のばあいには、その主著『国民的体系』からの抜萃によるいくつかの教科書版、しかも諸学年層別のそれぞれものが公刊されていて、そういう本に照応したごく簡単な伝記や論著が公刊されつづけ、文献目録の学問的意義が水割りされるといふ特殊な事情がある。三、四の例をあげてみよう——**Friedrich List als Vorkämpfer für Deutschlands Einigung**. Für die Mittelstufe ausgewählt von Wilhelm Hans, 1925. 31 S. これは教科書として抜萃された小冊子。**Friedrich List: Kräfte und Mächte. Grundsätze, Lehren, Gedanken**. Aus seiner Schriften ausgewählt und eingeleitet von Hartfrid Voss, 1942. 247 S. Ⅱ *Die Bücher der Rose*. これは一般のための抜萃。ナチスが戦争を遂行中の出版である。F.J.Schönigsh: **Friedrich List**, 1933. 37 S. Ⅱ *Colemans kleine Bibliographien*,

Nr. 29. これは教養のための簡単な伝記。Tylla Ullmer (Paula Dusen) : *Friedrich List. Ein Kinder deutscher Einheit*, 1942. 363 S. これは女性の筆に成るやや感傷的な伝記で、各節の題名(例えば「亡命の国〔アメリカ〕」, お前をわがものにするには?)」)が示すようにその内容も「文学的」である(ついでにせるせば、この種の著書は目録の範囲の限界という問題をもひきおこす。例えば Walter von Molo: *Ein Deutscher ohne Deutschland. Ein Friedrich List-Roman*, 1931. 551 S. は副題の示すように小説であって、力作ではあるがこの目録には入っていない。ロイトリンゲンの市立図書館はこういう文献をほかにも蔵している。なお K. A. Messinger: *Friedrich List. Der tragische Deutsche*, 1930. 334 S. — 同右蔵 — は、副題を *Der Pionier des Reichs* と変えた新版の、一九四三年の版をこの目録は収載しているが、これも流暢な伝記ながらツルラーのものより学問的である)。——なおまたヘルツェルの研究文献目録もこの目録も、「ドイツ以外の国におけるリスト文献の収録に熱心でないことは、やはり一つの欠陥としなくてはならない。

さて、わたくしは自著『経済学史研究序説』(一九五七年)中の第四論文「フリードリッヒ・リスト」のなかで、当時までにわたくしの読みえたリストの研究文献を掲げた(一九〇—一九五頁)が、右のような研究史上の理由から、*Deutsche Bibliothek* の目録を手に、昨一九六四年になってはじめてテーレピンゲ

リスト文献とリスト文庫

ン大学図書館とロイトリンゲン市立図書館でひと通りの検討をおこなったときにも、今後のリスト研究のために必読すべき旧文献を新たには見いださなかった。ただし、わたくしの西ドイツでの勉学の主力は後述のリスト文庫における諸文献に向けられていたため、リストに関する著書以外の諸論説の検討は十分だったから、それらの全般については右の論断は保留しなくてはならない。また、かなり数多くの学位論文のなかには、水準はさまざま高くないとしてもいろいろ興味をひくものがあった。ここではそれらのなかから、いずれもテーレピンゲン大学図書館蔵のつぎの三点をあけておくにとどめ、その内容の紹介を他日に期待したい。Ernst Rasch : *Friedrich List und die politische Romantik*, 1924. Auszug. 4 S. (原本はキール大学) ; Franz Diernann : *List's Verhältniss zum Naturrecht, namentlich in den Begriffen der bürgerlichen Gesellschaft und Korporationen*, 1928. 46 S. ; Georg Kalhorn : *Die Gegenwartsbedeutung der nationalen Wirtschaftsauffassung Friedrich Lists*, 1934. 49 S. なおまた、いうまでもないことだが、わたくしの『経済学史研究序説』以後のリストの研究文献は、新たに補充されなくてはならない。

わたくしはここで、本格的なリスト研究のために読むべき研究文献を、著書だけに限って、しかもきわめて少数にまで選択して、示しておこう。こういう厳しい選択はもともと無理であ

るから、ことに限定されたテーマを持つ研究者は、みずからそれを補完すべきである。だが反面、リストに関する大著には、観念上の混迷のゆえに——意識して平明な文体を駆使したりリスト自身の論著とは対照的に——読みにくくものが少なくなく、それらの通読が今後のリスト研究のために不可欠であるとは、十分な自信をもって断言することができない。いずれにせよ、リスト研究者はまず第一にリスト全集を精読し、第二に後述のリスト文庫の諸資料をできるかぎり利用し、第三にこれらと並行してリストの歴史的・思想史環境の理解につとめ、第四にドイツ資本主義の現在までの展開を注視し、第五に学説史上におけるリストの位置づけについて考察すべきであって、研究文献の検討は、これらの各段階をいつての手引として自由におこなえば足るであらう（ただし第四の段階は、リスト研究史の詳細な検討は、それ自身ドイツ資本主義→帝国主義の展開の過程を側面から有効に照射するはずである）。

リストのおもな研究書（リストの原典でそれに付された編者の解説ないし伝記が重要なものはこれを掲げた。ただしこゝにうもゝとして最も重要なのは全集各巻の解説である）。*Friedrich List's gesammelte Schriften*, hrsg. von Ludwig Häusser, I, Teil, 1850; Fr. List: *Das nationale System der Politischen Ökonomie*, 7. Auflage, hrsg. von K. Th. Eheberg, 1883; Artur Sommer: *Friedrich Lists System der politischen Ökonomie*, 1927; Alfred Meusel: *List*

und Marx. Eine vergleichende Betrachtung, 1928; Ernst Babel: *Der innere Markt bei List und Bismarck*, 1929; Friedrich Lenz: *Friedrich List, die „Vulgärökonomie“ und Karl Marx*, 1930; Hans-Peter Olshausen: *A. a. O.*; Fr. Lenz: *Friedrich List. Der Mann und das Werk*, 1963; Eduard Micha Michaelis: *Die Grundgedanken in Friedrich Lists System der politischen Ökonomie, mit besonderer Berücksichtigung der Jugendarbeiten*, 1937; Gertrud Mayer: *Friedrich List als Agrarpolitiker*, 1938; Carl Brinkmann: *Friedrich List*, 1949; Fr. List: *Das nationale System der Politischen Ökonomie*. Die sechste Auflage der Waentigs Ausgabe, hrsg. von Hans Gehrig, 1950; Günter Fabiunke, *A. a. O.*; H. Gehrig: *Friedrich List und Deutschlands politisch-ökonomische Einheit*, 1956; Georg Weipert: *Der späte List. Ein Beitrag zur Grundlegung der Wissenschaft von der Politik und zur politischen Ökonomie als Gestaltungslehre der Wirtschaft*, 1956; Fr. List. *Das nationale System der Politischen Ökonomie*. Volksausgabe, hrsg. von A. Sommer, 1959; Fr. List: *Das natürliche System der Politischen Ökonomie*, hrsg. von Günter Fabiunke, 1961; Paul Gehring: *A. a. O.*——このほか、モイゼセル、ハーヴェル、ロヒャエリス、ブヤヤーらの諸著について、筆者の上掲書の第五論文（『全

集』以後のリスト研究」)で、またゲーリヒの編書・著書とフアビウンケの著書とについては同書の第六論文(「東独のリスト」)で、批判的な紹介がなされている。またブリンクマンの著書とフアビウンケ訳編の『自然的体系』とは、おなじく筆者によって——前者は「フリードリッヒ・リスト小伝。カアル・ブリンクマンに拠る」(福島大学『商学論集』二二(二))として、後者は「リスト研究における東独と日本」(同誌三一(四))のなかで——紹介し論評されている。なお Hermann Brügelmann: *Politische Ökonomie in kritischen Jahren. Die Friedrich List-Gesellschaft E.V. von 1925—35, 1956* は、直接のリスト文献とはいえないけれども、リスト協会の歴史を詳しく語ってリスト全集の編集事業やリスト文庫の成立事情に関する多くのことをわれわれに教えてくれる。全集と文庫との利用のためには、この本は不可欠のものである。

(日本におけるリスト研究書としてはつぎが挙げられる。高島善哉『経済社会学の根本問題』一九四一年、新版、『経済社会学者としてのスミスとリスト』一九五三年、板垣与一『政治経済学の方法』一九四二年、改訂版、一九五一年、新版、一九六三年。大河内一男『スミスとリスト』一九四三年、全訂版一九四四年。——高島教授のものは四一年版を、板垣教授のものは六三年版を推す。大河内教授の五四年版はリストの部分に関しては初版とおなじ。小林昇『フリードリッヒ・リストの生産力論』一九四八年。松田智雄編『近代社会の形成』一九四九年。

リスト文献とリスト文庫

小林昇『フリードリッヒ・リスト研究』一九五〇年。同『経済学史研究序説——スミスとリストス——』(「前掲」)。このほか読むべき論説として、富永祐治「ドイツ国民的交通組織論の先駆フリードリッヒ・リスト」(同著『交通学の生成——交通学説史研究——』一九四三年、所収)。比較的新しい論説として、松田智雄「リスト農業理論の基盤」(「矢内原先生還暦記念論文集、上、『古典派経済学』一九五八年、所収)。久保芳和「アメリカ体制の派経済学の確立——アメリカ時代のリスト経済学——」(同著『アメリカ経済学史研究——アメリカ体制派経済学の生成と発展——』一九六一年、所収)。松田智雄「ドイツ商人・工場主協会設立前後とリスト」(「脇村教授還暦記念論文集」、(一)、一九六二年、所収)。住谷一彦「フリードリッヒ・リストの土地制度論」(「立教経済学研究』一ノ二、三)。同「フリードリッヒ・リストの歴史認識について」(「同右』一五ノ一、一六ノ一)。相川哲夫「リスト『農地制度論』の特質」(「土地制度史学』一四)。これらの新しい諸論説については、筆者の前掲の「リスト研究における東独と日本」のなかで、採りあげて若干の論評を加えてある。以上にさらに、最新のつぎの文献を補充しておこう。住谷一彦・肥前菜一「ドイツの保護主義政策論——フリードリッヒ・リストを中心に——」(「有斐閣『経済政策講座』第二巻、一九六四年、所収。これは分担執筆で共同執筆ではない)。住谷一彦「フリードリッヒ・リスト——ドイツ資本主義論史研究の視角から——」(「有斐

『経済学史講座』第二巻、一九六五年、所収。』)

4

リスト全集(十巻一二冊、一九二七—三五年)の刊行の母胎だったフリードリヒ・リスト協会は、一九二五年九月にハイデルベルクに設立され、やがてその役員は、Spiehoff(会長)・Salin(書記長)・Goesser(経理責任者)・E. v. Beckerath, Dusing, Harms, Lenz, Nasse, Oncken, Saemisch などに決したが、この協会はただちにその活動の記録と報告のため、ごく質素なパンフレットのかたちで *Mitteilungen der Friedrich List-Gesellschaft e. V.* を発行し、それは一九二六年九月一五日の第一号から三六年二月一日の第三〇号まで継続した。ただし、リスト協会自身はナチスの圧迫によってすでに三四年に解散し、その一月三〇日の第二七号は、同年七月におこなわれた、当時の会長ホルムスによる解散公告を掲載しており、そのあと二二の号は、この協会の事業の収束のためにつくられた List-Stiftung が実際には刊行したわけである。この *Mitteilungen* は、時局への顧慮とせよ、あるいは経理上の必要とから、リストないしリスト全集に直接関係しなす事業の報告などを載せているが——例えば第五号には協会の主催した「現代ドイツの交通問題」に関する討論の記録が、第二〇号にはおなじく「ドイツの農業政策」に関する会議の報告がある——、それら以外のものは多くがリスト文献の範囲に属するものである。

る。わたくしは昨年、ロイトリンゲン市長のカルプフェルト氏とリスト文庫の主任のシュヴァルツ博士との好意により、*Mitteilungen* の全冊をはじめて入手できたので、それがあつてリスト関係の諸論説の題名だけをここに紹介しておきたい。

William Noitz : Friedrich List in Amerika. (Nr. 2./15. Okt. 1926.) 13 S.

Edgar Salin : Zur Frage der Listschen Preisschriften. (

Aus unveröffentlichten Briefen Friedrich Lists.) (Nr.

3./30. Nov. 1926.) 11 S.

Artur Sommer : Friedrich Lists Pariser Preisschrift

von 1837. Ihre Bedeutung und Ihre Stellung im Gesamtwerte Lists. (ibid.) 50 S.

Max Hoeltzel : Friedrich Lists Büsten und Bilder. (Nr.

4./15. März 1927.) 4 S.

Béla Földes : Einige Daten, die Beziehungen Friedrich

Lists zu Ungarn betreffend. (Nr. 6./1. Nov. 1928.)

3 S.

Friedrich Lenz : Über einige List-Funde in London und

Moskau. (Nr. 10./10. Febr. 1930.) 1 S.

Erwin Wissemann : Neues aus Lists letzten Lebens-

jahren. (ibid.) 3 S.

Artur Sommer : Über das Wachstum der tragenden Ge-

danken des Nationalen Systems. (Nr. 12./15. Sept.

1930.) 25 S.

Ein neuer List-Fund. (Nr. 18./30. Mai 1932.) 2 S.

Theodor Steinle : Friedrich List und die Auswanderungsbewegung aus Württemberg im Jahre 1817. (Nr. 20./20. Dez. 1932.) 5 S.

Das Inventar von Lists Nachlass. Vorgegangen (Vordem) k. k. Landgericht Kufstein am 4. Dezember 1846. (Nr. 21./10. Juli 1933.) 5 S.

Artur Sommer : Der Wandel des Wissenschaftsbildes

Friedrich Lists. (Nr. 29./5. Mai 1935.) 7 S.

これら一二の論説の内容、およびそのほかに *Mitteilungen* がふくむ、リスト研究に間接に関係のある記事なごし報告の類の要点については、別に解説する機会を持ちたいと思う。

ところで、リスト協会の収束の仕事を担当した上記の List-Stiftung (会長 F. E. M. Saemisich) も一九三五年には解散を余儀なくされたが、戦後の五四年一二月に至って、サリーントと E. v. v. シッケラートとの両教授を首唱者として、『デュッセルドルフに於いたたびリスト協会が設立された。ただし、ききにリスト全集を刊行したのは Friedrich List-Gesellschaft であり、再建されたものはフリードリッヒとごう Vorname を除いた List Gesellschaft E. V. であつて、後者はその最初の「プログラム」によれば、『ヨーロッパ諸国における青年層の育成への寄与、とくに汎ヨーロッパ的な諸経済問題に関する』専

リスト文献とリスト文庫

門家たちの会議の開催、ヨーロッパ統合・原子力の経済的利用・ドイツの新通貨の歴史等についての研究、などを目的とするものであるから、リストの研究のための団体ではすでないのである。ただ、往年のリスト協会の有力な指導メンバーであつたサリーント、シッケラート、ゾンマーらがそこで依然として有力な役割を果たしていることは、リストとこの新しいリスト協会との関係を維持させるものであり、この事実はやがて、戦後の西ドイツの学者たちのコスモポリターニッシュなリスト解釈に對する東ドイツのフュビウケンてのきびしい批判(前掲書)を生むことともなつたのである。新リスト協会とリストとの関係は、昨年七月三・四両日にロイトリンゲン市でおこなわれたリスト生誕一七五年記念式典がロイトリンゲン市とこの協会との協同主催のかたちで進行したことから知る事ができる。またゾンマーによるリストの『国民的体系』の新大衆版やフリーゲルマンの *Politische Ökonomie in kritischen Jahren. Die Friedrich List-Gesellschaft E. V. von 1925—1935* (いづれも前掲)は、この協会の出版なのである。

この新協会もまた *Mitteilungen der List Gesellschaft* を出版し、それは一九五五年九月の Nr. 1 以来、昨六四年九月の Fasc. 4, Nr. 13/14 にあふんでゐる。わたしはこの協会に加入することを欲しなごのび、新しい *Mitteilungen* のその数冊を手許に置んでゐるだけである(すなわち Nr. 1 : 4 ; Fasc. 3, Nr. 3 ; Fasc. 4, Nr. 8, Nr. 13/14)。そ

外の号は、現在発行の事務をおこなうてゐる Prof. Dr. Harry W. Zimmermann, Hardstrasse 110, Basel (Schweiz) のもとにはすでになくなつており、リスト文庫にも数冊しか届いていないが、他所で容易に見ることができなはずである。(ちなみに、右のシンマーマン教授は、新リスト協会が国際的研究センターを設立するための準備として一九六〇年につくつた List Institut の責任者である。この Institut は、六三年に印刷されたプログラムによれば、ヨーロッパの経済的・社会的発展の趨勢をインスマール建設とを研究課題としてゐる。新リスト協会の派生機関であるこの組織においても、指導者はハーゼルのサリーン教授である。なお、新リスト協会の会員は雑誌 *Kyrios* を配布されてゐる。)

新しう *Mitteilungen* だも、しかし、おりおりリストに関する小論考が見られる。そのなかでわたしの読みえたものをいくつか掲げよう。

- Theodor Heuss (Bundespräsident) : Friedrich List —
 Würdigung von Mensch und Werk. Ansprache in der
 Feierstunde zur Neubegründung der List Gesellschaft
 1955 in Reutlingen. (Nr. 1./15. Sep. 1955.) 5 S.
 Hanns Heiman : Friedrich List im englischen Parlament.
 (Nr. 4./26. Juni 1956.) 2 S.

Arthur Sommer : Neue Erwerbungen des Reutlinger List-
 Archivs. (Fasc. 3, Nr. 3./9. August 1961.) 7 S.

Edgar Salin : Ein Nachwort zur List-Ausgabe als Vor-
 wort für künftige List-Leser. (Fasc. 3, Nr. 11/
 12.) 3 S.
 Karl Erich Born : Staat und Gesellschaft in der Auffas-
 sung Friedrich Lists. (Fasc. 4, Nr. 13/14, 15. Sept.
 1964.) 21 S.

(未見のものだが、A. Sommer : Fr. List an J. G.
 Flügel, 7. Okt. 1837, mit einem Fascimille [Nr. 9].
 4 od. 5 S. 及び E. Salin : Fr. List und der europäische
 Zollverein [Fasc. 2, Nr. 8]. 15 S. などがある。)

以上のうちシンマー教授のものは、新たに発見された、二通のリストの手紙と青年書記時代のリストに関する一資料とを、全文印刷したもので、前者は全集第八巻を補うものである。またテュービンゲン大学経済史講座の新任ボルン教授のものは、昨年おこなわれた上記のリスト記念式典における祝賀講演(七月四日)で、最新のリスト研究文献の一つである。教授のリスト研究はむしろ今後の深化と展開とが期待される。この講演は、別に何枚もの古版画や手稿などの写真を入れて、*グラフィック誌 Baden-Württemberg*, Heft 9, 1964 年と同時に掲載された。なお、右の講演を載せた新しう *Mitteilungen* の最近号(現在)は、全冊に記念式典の進行次第と式場での諸祝辞を収め、第一号における、新リスト協会の創立にあつた故大統領ホイスの祝辞と照応しつつ、こゝにその西ドイツにおけるリスト

評価の内容を物語っている。わたくしはたまたまこの式典に招かれて、その記事を日本に送った（「F・リストの記念祭」、『書齋の窓』一二七号）。チュービンゲンやロイトリンゲンのあたりの二、三の地方新聞も、式典に際してリストに関する記事を載せている。

5

わたくしは昨一九六四年の五月はじめから十月末までチュービンゲンに住み、おもに、隣りのロイトリンゲン市のリスト文庫 (Friedrich List-Archiv) にかよった。わたくしの知るかぎりでは、これまでにわが国からは出口勇蔵・板垣与一・松田智雄・林健太郎・矢田俊隆の諸教授がそれぞれここを訪れられたが、右の諸教授はここにとどまってその所蔵する資料を検討する時間を持たなかったから、わたくしは以下にこの文庫の内容について報告しておきたい。ただし、わたくしの利用できた日数も文庫の資料の量に対してはまだまだ不十分だったため、文庫の内容の報告といっても、資料の中味を選別して紹介するというのではないことをお断りしておかねばならない（わたくしはすでに『経済学史学会年報』の第二号に「リスト文庫のこと」という報告を送ったが、自分で校正できなかったためにそれに誤植が多いことと、若干の補充を加えたい願いとから、ここで右の報告を書き直すことにしたのである。したがって旧稿とは重複するところが多いことを許されたい）。

リスト文庫とリスト文庫

リストの生まれたロイトリンゲンは、大学町のチュービンゲンからは準急で十一分あれば行ける。この旧帝国都市は、そこは伝統のある製革工業を保ちつつもむしる繊維諸工業によって著名となり（一八五六年に織物学校、九一年に繊維工業のための国立の専門学校——Technikum——の設立）、これに製紙や機械の諸工業を加えつつ、南ドイツにおける工業の中心地となった。そのため今次の大戦では烈しい爆撃を受けたが、ようやく完全に復興して、人口は六万ほどながら富裕な近代都市として知られている。しかしこの町は、チュービンゲンとはちがって誇るべき文化遺産を持たないので、せめて「偉大なドイツ人」リストにつながる記憶をたいせつにしようとしている。リストの銅像が立つ駅前のリスト広場、その一角を占めるリスト・ホテル、リストの生家の跡にある雑貨店リスト・ハウス、リスト公会堂、リスト・ギムナジウム等々といったものがあり、また郷土博物館 (Heimatmuseum) の三階にはリストの遺品が常時展示されている（右のうちリストの銅像とギムナジウムと博物館とだけが被爆を免れた古いものである）。現在の市長カルプフェル氏 (Oberbürgermeister Oskar Kalbrell) はリストのことについても熱心で、前掲のゲーリント教授の本がチュービンゲンのモール出版社から刊行されたときにも、かなりの財政援助をし、序文をも寄せている。

しかし専門の研究者にとってだけ重要なリスト文庫ということになると、これは学校の教師のような人をもふくめて、ほと

一一五

などの市民がその存在を知らない。それは一つにはこの文庫が、市立文書館 (Stadarchiv) の特殊な分局として、文書館の *Spendaus* とする (これも戦災を免れた) 建物とは別に、市の Technische Ämter とする建物の地下室に戦後の仮り住まざるを待たざるからである。正確な番地は「(741) Reutlingen, Bismarckstrasse 15, Technische Ämter der Stadt Reutlingen」である。ロイトリンゲン駅からは東へ徒歩で五分ほどの距離にある。この地下室に「Stadarchivar の Dr. Paul Schwarz と E. Keller 氏と M. Maier 嬢と」ほかに臨時のタイピストと「総計四人の人たちがリスト文庫を守っている。シュヴァルト博士はドイツ中世経済史の専門家として、Alwinthembergische Lagerbücher aus der österreichischen Zeit 1520—1534, I—II (Veröffentlichungen der Kommission für geschichtliche Landeskunde in Baden-Württemberg, Reihe A, Quellen, 1. Band), 1958 とする資料集を編集しており、古い手稿類の解説が自在で、この人によって下記のようになりスト文庫の整理がおこなわれている。上述のリストの記念式典の際に市の郷土博物館で開かれたリスト記念展はおもにこの人の努力に依り、そのカタログ (Ausstellung: Friedrich List 1789—1846. Seine Freunde und seine Gegner. Heimuseum Reutlingen—4. Juli bis 2. August 1964) はリスト文献の一つに数えらるものである。ロイトリンゲン市は戦後の復興——新しい都市づくり——の仕上げとして市庁舎

の建設を進めており、来年には完成するらしいが、そのあかつきにはリスト文庫はこの新庁舎の一階に場所を与えられるということであるから、その利用は大いに便利になるはずである。しかし、すでにカルプフェル市長は一貫して文庫の公開の方針をとっており、リスト研究者に対する市の配慮は親切であって、現在でも、地下室の冷え込みを辛抱しさえすれば、誰でも文庫の資料を直接手にとって検討することができる。

だがそうはいっても、リスト文庫の利用はけっして不用意にはおこなえない。何よりもまずそれは印刷物と手稿類 (Handschriften) と他所にあるオリジナルの復写 (Abschriften) との合計二、七二七点——これは機会あることにわずかつながら増加する——をふくむ膨大なものであって、リストの周辺資料、つまり例えばさまざまな人がリストへあてた手紙、リストに関することでリスト以外の A から B へあてた手紙、青年書記リストやその同僚の報告書の下書き、リストの時代のパンフレット類、等々を多量に収め、したがってその性質上、リスト全集が収載しないものをむしろ蒐集の主力にしている。この点こそリスト文庫の特色であって、その諸資料の徹底的利用がリスト研究なしにリスト時代のドイツ経済史 (ドイツ産業革命前史) の研究に対してきわめて大きい意義を持つことを予測されるものである。わたくしの若干の検討は、それを確認するようには思われた。しかし実際には、リスト一人の手稿の解説だけならばいざしらず、きわめて多くの人々の手稿の解説はどうてい

容易にはおこなえないことである。それに、文庫の整理がいまのところ十分とはいえないので、必要な資料をカードによってすぐに引き出すというわけにはいかない。だが、リスト文庫についてのこれらの問題をいっそうよく理解するためには、われわれはあらかじめ、この文庫の成立の事情をひとわり知っておかねばならないであろう。それは旧リスト協会の *Mittellungen* の Nr. 29 : 5, Mai 1935 (Das Reutlinger List-Archiv und seine Eröffnung) と前掲のブリュッセルの著書とに記録されているところである。

その生涯の大部分を流浪の旅に送ったリストは、そういう境遇にもかかわらず自分の仕事の意味に対する自覚から、身近の手紙や文書類の保存に留意していた。——もともと、自分の手で公刊できたものの原稿は破棄したし、放浪のあいだに紛失したのももとより多かった(とくにパリ時代のもの。『自然的体系』と同時にやはり懸賞論文として書かれたはずの、鉄道に関する論説もこれに属する)が、そうして、このようにして残されたものは、一八八九年すなわちリスト誕生百年の記念日にリストの協力者であった長女エミリーエの手からロイトリンゲン市に贈られた。これがやがてリスト文庫の基礎となったものである。ただし、エミリーエはそれ以前から少しずつ市への寄贈をはじめていたし、一方、普仏戦争にあたって献金のためにいくつかの重要な文書(例えばラファイエットの手紙の一部)を競売に出し、それらの多くは「ユンヘン国立図書館 (Staats-

リスト文献とリスト文庫

bibliothek) の所蔵に帰した。また、リストの死後まもなく、故人の友人であった歴史家ホイサーが、その編集した最初のリスト著作集(上掲の *Friedrich Lists gesammelte Schriften*, hrsg. von Ludwig Häusser, 2 Tle., 1850) の第一部にあてた故人の伝記を書くにあたって、残された文書がリストの娘たちから一時的にホイサーの手に托されたことがあって、そのうちのある部分が、ホイサーの死後その遺稿にまぎれてハイデルベルク大学の書庫に入った。リスト全集の刊行によってはじめて復元された「重要な論説『農地制度』 (Die Ackerverfassung, die Zwergwirtschaft und die Auswanderung, 1842) の完全原稿などがこれにふくまれ、それらは Häusser-Codex と呼ばれている。

前述したように、リスト協会は最初からリスト全集の刊行をおもな目的として一九二五年に設立され、翌年には *Mittellungen* の第二号に補巻としての伝記をふくむ八巻の計画——完成したものは十巻二冊——を発表したが、その編集のために、世界の各地に散在するリストの原稿や関係文書類を複写し、その範囲はウィーン、パリ、シュトラースブルク、ベルリン、ライプツィヒ、ゴータ、ロンドン、ワシントンなどの諸図書館におよんだ(一九二五年にゾンマーによってパリの Institut de France の文庫で見いだされた『自然的体系』の原稿は、今次の大戦中に失われ、リスト文庫にある写真複写が現在では唯一の原本となっている)。協会はまたそれと同時に、購入できる

リストのオリジナルは購入するとともに、諸論説の初刷、関係を持った諸雑誌、諸国における『国民的体系』の翻訳等の入手にもつとめた。しかし、リスト全集はやがては完成すべき事業であり、そのために集めた文献と資料とは別に保存されるべきであったから、これらをすでにロイトリンゲン市の所蔵に属する資料に合体させることにするという了解が、同市と協会とのあいだに持たれるに至り、市の側では別にリストの研究文献の蒐集をおこなうことになった。この後者の成果は、現在市立文書館（一部はリスト文庫）で見ることが出来る。しかもロイトリンゲン市は、そのごさらに、リストの曾孫 Fr. L. Pacher von Theinburg から新たにリストの家族関係の手紙の寄贈も受け、所蔵する文書の内容を豊かにした。こうして、一九三四年の末にリスト文庫が正式に開設されることとなったのである。それは「資料と文献とをそなえ、完全な意味において政治経済学のための科学的研究施設」となるべきものであった。市の広場に近い Spendhaus の古い建物の一階が改造されて、文庫はその広い一角を占め、それに接して、リストの遺物を展示するリスト室がつくられた（これはすでに一九二〇年来おなじ建物の階上にあった展示室を移したものである。現在は近くの郷土博物館に移転）。

しかしこの一九三四年は、大統領のヒンデンブルクが死に、ヒトラーが総統となってナチスの支配力が決定的となった年である。リスト全集は一九二七年に最初の配本(第四巻)を出し、

三五年までかかって完成したが、その刊行の母胎であったリスト協会は、実際上の首脳のスリーン教授がユダヤ人として迫害されてハイデルベルクからバーゼルに逃れ、これと手を携えていたハルムス教授も社会的影響力を奪われるという事態となつて、文庫が設立された年の七月には、当時の代表者ハルムスの名で解散の公告をおこなうことを余儀なくされた。上記のように、List-Stiftung がその跡を継いで翌年に全集を完成させたけれども、リスト文庫の整備の事業もその時点までで中断されたのである。だがこの時までにはリスト協会(および List-Stiftung) は、全集の編集に並行させつつ、文庫に対して保管用具の提供、諸資料の分類と整理、カードの作成等の仕事をおこないつづけたのであって、それには一貫してゾンマー——ハイデルベルク、ギーセンを経て現在はハイデルベルクの教授——の貢献が大きかった。文庫のカードの第一七七一枚まではゾンマーのペンで丁寧に作成されており、これらの資料に手稿類の多いことを思えば、この文庫を全面的に踏まえたリスト全集の編集がとくにゾンマーに費させた努力は、なみなみではなかったといわねばならないのである。

だが、これとともに、全集の編集に伴う新発掘の資料の急速な増加、ことに前記のバッヒャー・フォン・タインブルクからの書簡の提供による、リストの身辺に関する資料の急速な増大は、最初に予定された全集の総量をいちじるしく膨張させた反面、予告されていた、サリーンによるリストの伝記の早急な完

成を不可能とさせた。ゲーリンク教授のさきにあげた新著は、この、むしろよるこぶべき理由から挫折した本格的なリスト伝の作成が、その前半だけながら、ようやく最近に実現したことを示すものである。もともと、ナチス時代にはリストの本格的研究は、やや興味を惹く一つの学位論文「すなわち Gerhard Hirth, *Die Behandlung der sozialen Frage im Werke Friedrich Lists*, 1943, 164 S. (テュービンゲン大学蔵)を除いては、事実上中止されていたといつてよい。ゾンマー教授も拘禁されたということである。一方、大戦とロイトリンゲンの被爆という結果とは、リスト文庫に対しては、Spendhaus から郷土博物館への移転、後者からいまの場所への再移転を強いた。そうして市民に親まれて来た右の二つの建物は奇跡的に破壊を免れたが、一九四五年以来、文庫がそのいづれへも帰らずにいまの Technische Ämter の地下室に潜んでいることは、その所在をたいていの人が知らない理由なのである。しかも、最近になってシュヴァルト博士の仕事がはじめられるまでは、文庫の整理の継続ということも放置されていたのであった。

6

ところで、リスト文庫の諸資料は、上述のようにロイトリンゲン市立文書館と現在の文庫とに経過的に分離保管されている研究文献や翻訳を別として、Technische Ämter の地下階の市の文書類を納めたやや広い部屋の片隅に、扉のある一個の鉄

リスト文献とリスト文庫

製の棚に保蔵されている。この棚を蓋のないボール箱八〇個が満たしており、そのうち五二箱がオリジナル、残りの部分が Photokopie とタイプとの Abschriften と、カードは Abschriften をさくまない。上記の Häuser-Codex (これは Ackerverfassung の完全原稿 [Heid. Hs. 1744, fol. 164 ff.] 以外に、リストの手紙四通、リストへの手紙五通、その他の手紙一四通、をふくみ、二冊に製本されているもので、ハイデルベルク図書館の Handschriften の室で見ることができぬ)も、ホイサーの遺族が誤ってこれらを Häuser-Nachlass のなかに混入してハイデルベルク大学に無権利のまま寄贈したのであるから、リストの遺族たちの意思からすれば当然文庫に属すべきものとして、現在文庫の側から引渡しを請求しており、これに対して前者の積極的な抗弁もないようである、ともあれこの一棚八〇箱こそ、リスト文庫の中核、あるいは精随といふべきである。ちなみに、日本でのリスト文献も、有力な研究書と翻訳書とは、この棚の隣りの同様の棚に、他の比較的わずかな文献とともに保管されており、送付の労をとられた板垣与一教授によるそのカタログも文庫の書類綴りにある。ただ、正木一夫訳『アメリカ経済学綱要』と同訳『ドイツ人の政治的経済的国民統一』(いづれも改造文庫)とは、現在日本での入手も困難なので、欠けている。

このリスト文庫は、その公的な設立ののちに出版されたリスト全集第九巻に一四四頁から成る補遺として一部だけが収録・

公表されはしたけれども、依然として、「将来のリスト研究のすべてにとって汲みつくせぬ宝庫」である。この言葉は旧 *Mitteilungen* (Nr. 29, S. 542) のものであるが、またわたくしの実感でもある。だが、この貴重な文庫の整理についていえば、そこにはまだいろいろな欠陥があって利用者を悩ませる。第一に、文庫のカードは前記のように一七七一枚までがゾンマー教授の手書きで、あとは最近になってシュヴァルツ博士が完成したものだが、この前者はまだタイプ化がおこなわれていなかった。しかしこの不備はすでに解消していることが期待される。第二に、文庫の八〇箱のそれぞれに収められた資料は、ほぼ箱ごとを一括して覆い紙がかぶせてあり、その表面に、さまざまな時期のさまざまな人による筆で、内容が示されている。たとえば第三箱 (Fasz. 3) の資料は赤い厚紙で覆われ、List als Professor an der Fakultät zu Tübingen 1817—1819 とあり、第四箱 (Fasz. 4) には同様の紙に「Briefe von und an Sch-nell in Nürnberg」および Arnoldi und Anderes とある。つまりこれらの箱はいちおう分類別の箱なのである。けれどもこの分類はまったく無原則のものであり、そのうえたとえ第一九箱は Tagebücher und Briefe aus der Zeit des Strass-burger Aufenthaltes……とあるのに、どうしたものかそのなかに Tagebücher は一つも見当らぬ。それに、これらの表書きはそろそろうすれて読みにくくなっている。文庫のカードには「これらはまったく記載されていず」Fasz. Nr.: 4, 15 (第

四包み〔この若い番号では、第四箱と一致〕の第一五番目)と
いうふうにあるだけである。

しかし、このように文庫がすでに内容別に分類されているので、カードもそれに従って、右の例示のように各箱の表書きの Fasz. Nr. をそのまま記載している。つまりそれは年代別ではない。しかも一方、この内容別分類のしかたがはなはだ勝手なので、カードの索出的効果(それがカードの生命であろう)は残念ながらきわめて乏しいといわねばならない。これが第三の最大の欠陥である。こういう分類が確定したについては、一九二六年に文庫の仕事をした、フリードリッヒ・レンツ教授の弟子に責任があるらしい (Brigelmann, a. a. O., S. 173——サリン教授の手紙) が、それ以前に書かれたものも多いと判断される覆い紙を破棄する自由を彼が持たなかったとすれば、それも致し方なかったであろう。第四に、それなら最近の、シュヴァルツ博士による全カードの完成を機会に、それをもとにして新たに年代順のカードをなりともつくればよい、と考えつくであろう。現在のカードにも、年代の分るものはそれが記載されているのである。だがこれもまた残念なことに、リスト全集はそのコンメンタルで文庫の資料への指示を旧来の分類番号に拠っておこなっているため、後者を廃棄したり棚上げしたりすることは、研究上の混乱を予想すればとうてい実行が不可能である。こうして、何かある主題、ことに資料の覆い紙の表書きのどれにも属さない主題に関して、それをリストの生涯の特定

の時期について検討しようとするばあい、あるいは、特定のあ

Lfd. Nr. : 01 Datierung : Leipzig, 16. Okt. 1916
Fasz. Nr. : 1, 1a Abdruck :
Art und Umfang : Gedrucktes Rundschreiben, 2S.
Titel : Ohne Titel, Unterzeichnet : Ernst Weber aus Gera

Inhalt : Rundschreiben an die auf der Leipziger Messe anwesenden Fabrikbesitzer. Aufforderung, einen Verein zum Schutz der deutschen Industrie zu bilden u. eine Denkschrift an die Bundesversammlung vorzubereiten. Hinweis auf eine beigelegte Ausarbeitung E. Webers, die als Entwurf für diese Denkschrift gedacht war.

小林注。Abdruckの項が空白なのはむろんそれ
れがまだ印刷されていないことを示す。

は、いぢぢぢの資料は、Art und Umfangの項に、例えば

リスト文献とリスト文献

る時期における
リストの全貌に
迫ろうとするば
あい、研究者は
文庫のカードを
はじめから終り
まで繰ってみな
くてはならない
わけである。

カード自体、
つまり一枚一枚
のカードはなか
なかよくできて
おり、内容の摘
記も、しばしば
裏面にわたって
詳細である。そ
の第一枚目を示
せば上のようであ
る。

このカードで

手紙ならば Br. (Brief) 18 oct. というようにその分量が示
されているから、量的な重要性についての判断はそれででき
る。カードには色分けがしてあって、赤がリストへの手紙、緑
がリストからの手紙、白が学問的論説、等々ということにはな
っているものの、これらの色の種類はかなり多くて類似のもの
があるうえに、検討してみるとこの分類も相当あいまいであっ
て、それはシュヴァルツ博士もみとめるところである。この色
分けはゾンマー教授がおこなったものらしいが、シュヴァルツ
博士は自分の手書きしたカードにはそれを採用していないし、
全カードのタイプ化にあたってもおなじ方針に従っている。し
かし全カードには資料の従来の配列のままに一貫番号をつけて
あるから、研究者はこれを利用して、カードの写しを自己用の
分類に従わせることができる。

戦後に再出発した新しいリスト協会は、すでに知ったように
もはや直接リストに関する学問的活動を目的としないから、リ
スト文庫に対しては、サリーン教授ら若干の指導者や有力なメ
ンバーの持つ従来の個人的関係を除いては、格別の権限は有し
ないように解されるし、また文庫の諸資料に対する所有権はは
つきりとロイトリンゲン市にある。だから、現在の市長カルプ
フェル氏と市立文書館の諸氏とがリスト文庫の利用に対してき
わめて開放的であるのは、研究者にはよろこばしいことであ
る。もっとも、すでに知られたように、文庫はとても簡単には
検討しつくせるものではないから、わたくしはひとまずカード

の全部を写真にとつて（その際文庫のマイヤー嬢のお世話になつた）、それを持ち帰り、すでに日本で焼付けてカード大に引伸ばし、カード箱におさめてある。わたくしはこのことを思い立ったときに、『経済学史学会年報』の第二号に西ドイツから送つた前記の報告につきのようにした。「わたくしはタイプが完成しだいその「文庫の」全カードの写真をとらせてもらつて……、それを日本の研究者のために持ち帰り、帰国後時間をえて、このカードの時代順配列と、こうしたうえで、内容解説を除いた部分の印刷をおこなうことを考えている。……研究者は、この印刷物からカードの写真（の内容解説）にさかほり、さらにその実物については文庫に問い合わせることも可能となるはずである。わたくしのあとに、ロイトリンゲンまで行つて文庫による何ごとかの本格的なおこなおうとする人がでてきたときにも、わたくしのこれらの用意は有効であるうと考へている。」——いまわたくしはこういう計画の実現がなかなか困難であることを、右の文章を書いた当時よりもつよく感じているが、さしあたって手許のカード箱や *Mittelungen der Friedrich List-Gesellschaft* など、研究者諸氏の利用に供することができれば幸せである。

（一九六五年三月二五日）